

信頼される学校を作るための学校経営

学校通信の活用で子供の見方を変える保護者への啓発

田頭 裕

(2020年2月18日受理)

School Management to Create a Trusted School Enlighten Parents to Change Children's Perspective by Using School Communication

DENDO yutaka

I 主題設定の理由

著者は東京都小平市で4年間、練馬区で7年間小学校の校長をしてきた。校長在職中に保護者との関係の中で、感じたことが二つある。一つ目は、学校がどのように考えて、何を大切にしているのかをあまりよく理解してもらえず、学校のことを信頼していない保護者がいることである。二つ目は、子育てに一生懸命になるあまり、子供へきつくあたりたり、他の子供に劣ってはいけなと力んでしまったりしている保護者がいることである。このような保護者に学校の信頼を回復し、子育てへの精神的なゆとりをもたせ、保護者の目を子供に向けさせて、子育てを楽しんでもらいたいという願いをもつようになった。




図1 5月の校長室前の掲示

私は、学校のことを保護者に理解してもらうためには、まず学級が安定し、子供が毎日家に帰った時に「学校は楽しかった」と、言葉や表情で表すこと、子供に「今日はこんなことを学んだよ。こんなことができるようになったよ」等と語ってもらえること、また、子供が学校で担任によく見てもらっていることを言葉や態度で保護者に伝えてもらうことが一番であると考えている。そのために、図1のような掲示物を用意したり、学校全体の環境を整えていったりしていった。また、学年の教員の組み合わせや、子供たちと教員の相性をよく見極めて担任を決めたり、校長の方針を学校職員に伝え理解させていったりして、学校職員が子供を通じて、学校の信頼を一つずつ築いていけるようにしてきた。

校長には、学校職員を介さずに直接保護者へ働きかける方法がある。それが学校通信である。この学校通信をうまく活用することで、学校の考えを保護者に伝えたり、子育てへの保護者の気持ちを和らげたり、我が子の現実を理解して子育てを楽しめるように保護者を啓発できるのではないかと考え、本実践を試みた。学校通信は毎月発行しているが、難しいことが書いてあると思われては、読んでももらえなくなる。まずは保護者に学校通信を読んでもらえるような工夫が必要である。そのため、私はできる限り親しみ易い文面にすることを心がけてきた。読み始めたら一気に読めるよう

に、難しい言葉は使わずに易しい言葉で書く。また、小さな写真を1枚入れて、この写真の部分だけをカラー・レーザープリンタで印刷して、後は通常の印刷機で印刷することで、コストをかけずに保護者に興味・関心をもってもらえるようにしてきた。私が平成24年から7年間勤務した練馬区立大泉学園緑小学校で作成した学校通信を活用した事例の中から、特に効果が上がったと思われる、六つの実践事例を取り上げ、まとめと考察を行った。

II 学校通信を活用した保護者への啓発



みどり

平成30年度
練馬区立大泉学園緑小学校
校長 田頭 裕
平成31年 3月 1日


「子供が小学生でいる時間を大切に」 校長 田頭 裕

3月を迎えました。6年生はもうすぐ卒業です。6年生は12歳です。人生の約半分が小学校在学ということになります。今も彼らが入学した頃の小さいながらも元気を思い出します。あれから6年間様々なドラマがありました。まだまだ課題はたくさんありますが、今はこんなにも立派になったなあと思うことが、とても多くなってきました。子供は成長していくんだということを改めて感じているところです。子供が中学校に進むと勉強や部活などが忙しくなります。また思春期のまっただ中で家で話をあまりしなくなる子もいます。親と一緒に勉強することを楽しんだり、不安になって親を頼ってきたり、家族でどこかに出かけるのを素直に喜んでくれたりするのは、小学生のうちだけかもしれません。私の子供が小学生の時には、子供だけで長い時間留守番をさせるわけにはいきませんし、何かにつけて手がかかるし、大変と思ったこともありました。二人の子供が成人して夫婦二人の生活にもどると、時々子供たちが小学生の時代を懐かしく思い出します。「あの頃は大変だったけど、あの頃はとても楽しかったな。」という思いです。小学生の年代は体験を通してぐんと成長したり、あるきっかけで急にできるようになったりすることがあります。幼いけれどもけなげに頑張っている姿を見ると感動してしまいます。親の都合で無理に成長させようとしてもなかなかうまくいきません。子供には一つ一つのことに成長するタイミングがあるようです。そのタイミングに合わせて適切な働きかけがあると、子供はぐんと伸びていきます。子育てが終わって振り返ってみると、親の働きかけはもちろん大事ですが、結局子供は親の背中を見て育ってきていたんだという思いを強くしました。子供が小学生でいられるのは、6年間という限られた時間です。まだ手がかかって大変だと思うこともあるかとは思いますが、保護者の皆様には、子供が小学生でいる時間を大切に、そして子育てを楽しんでもらいたいと願っています。

今年は暖かい日が多いので、桜の花が早く咲きそうです。校庭の南側中央にある桜の花は今年が見始めになるかもしれません。心に残していただくと嬉しいです。

本日3月1日、6年生を送る会が行われました。全校の児童が一つの絆で結ばれたような、とても心温まる会になりました。こんなにもすてきな子供たちの関係が築けているのは、学校を支えてくださっている地域の皆様、保護者の皆様の温かなご支援ご協力があるからと感謝しています。

2月19日送別球技大会
6年生と5年生のドッジボール、バスケットボール、サッカーの真剣勝負です。



〈3月行事予定〉

日 曜	行 事	日 曜	行 事
1 金	6年生を送る会、感謝の集い、保護者会(6年)	16 土	
2 土		17 日	
3 日		18 月	全校朝会
4 月	全校朝会、保護者会(2,4年) 2分の1成人式(4年)	19 火	清掃週間終
5 火	避難訓練、保護者会(1,3年)	20 水	給食終
6 水	4時間授業	21 木	春分の日
7 木	安全指導	22 金	修了式、卒業式予行
8 金	委員会活動	23 土	
9 土		24 日	
10 日		25 月	卒業式
11 月	全校朝会	26 火	春季休業日始
12 火	清掃週間始	27 水	
13 水		28 木	
14 木		29 金	
15 金		30 土	
		31 日	

3月生活目標 ○1年間のまとめをしよう

- ・心をこめて、卒業生を送ろう
- ・自分の持ち物を計画的に持ち帰ろう
- ・教室をきれいにしておいて次の学年に引きつこう

図2 大泉学園緑小学校学校通信 (2019.3)
(<http://cms.nerima-ky.ed.jp/weblog/files/158/doc/45338/367986.pdf>)

42

著者が勤務していた大泉学園緑小学校の学校通信は、図2のような構成である。A4表面の前半は、校長の巻頭言、下に月の予定を書く。裏面は毎月特集を組んで、様々な行事の紹介や生活指導上のトピック、子供の書いた言葉などを載せる。校長の巻頭言は短く読みやすい文字数の800～1100文字程度でまとめている。また学校通信と全校朝会とを連携させて効果を高めようとした事例もある。

(1) 正しい鉛筆の持ち方の大切さについて啓発した実践

私の幼い頃は、変な鉛筆の持ち方をしていると、「ピシ」っと手をはたかれたものである。今は、そのような指導はできないが、子供たちには正しく鉛筆を持てるようにさせたい。大泉学園緑小学校の子供を観察したところ、正しく鉛筆を持っている子供は、どの学級も1割程しかいない。つまり、学級に数名ということである。話を聞く時には背中がしっかりと伸びてよい姿勢が取れる子供も、鉛筆を持って字を書き始めた途端に、顔を机にくっつける程近づけたり、手元を横からのぞくようにして背骨がSの字のように曲がったりしてしまう子供が約3割にもなる。子供が鉛筆を正しく持てない背景としては、幼い頃から文字や絵をかくことが多いことが挙げられる。幼い時は、指の力があまりないので、鉛筆できちんとした線を描くには、手の平全体で握って、鉛筆をしっかりと押さえないといけない。親指と人差し指の又の部分で鉛筆を固定しようとしたり、4本又は5本の指を使って鉛筆を押さえたりする子供もいる。少し成長して、指の力がついてきても、特に親から正しい鉛筆の持ち方を教わらないと、幼い時の持ち方のまま、学齢に達する。小学校に入学して、初めの授業で、鉛筆の持ち方を学習するが、もうすでに自己流の持ち方が固まってしまう子供が多い。指導する教員も、型どおりの指導はするところだが、実際に字をたくさん書くようになると、鉛筆の持ち方よりも、きれいに字が書けたかを評価するようになって、鉛筆の持ち方については、あまり気にならなくなり指導をしなくなる。保護者会や父母会、学校行事の受付等で、保護者の様子を見てみると、保護者の中にも親指と人差し指の又の部分で鉛筆を持って書いている人がたくさんいる。そこで、今の子供たちにこれから生きる資質の一つとして、正しい鉛筆の持ち方を指導することは、意義のあることと考え、全校での指導を試みた。



図3 (saita PULS,2012) を参考に簡単に正しい鉛筆の持ち方ができる方法を著者が撮影



図4 (saita PULS, 2012)を参考にダブルクリップを使った鉛筆の正しい持ち方を著者が撮影

まずテレビ放送による全校朝会を行い、「正しい鉛筆の持ち方が、正しい姿勢につながり、字を書いても疲れにくくなることや、書いている姿が美しく見えるということ」を子供たちに伝えた。次に、全校の子供たちに鉛筆を持たせて、図3のような簡単に正しい鉛筆の持ち方のできる方法を、私と一緒にやってみるようにさせた。子供たちはテレビの私の動作を見ながら、正しい鉛筆の持ち方をしてみた。また、図4のように鉛筆の先

から数cmくらいの所をダブルクリップで挟み、つまみの針金の部分に人差し指を入れると、簡単に正しい持ち方ができるということも紹介した。

鉛筆の正しい持ち方の大切さを保護者にも分かってもらうために、この全校朝会後の平成24年12月の学校通信で鉛筆を正しく持つことの大切さと、簡単に正しい持ち方ができる方法を示した。学校通信の書き出しを「先日、宿泊のためにあるホテルに行ったときの事です。受付に出てきた女性は、身のこなしや服装も決まっっていて、すてきな方だなあと思いましたが、ボールペンを持って字を書いたとたんに、私はなぜかがっかりとしてしまいました」[田頭 2012]のように工夫した。この女性は、子供の頃に鉛筆の持ち方について、あまり指導がされていなかったのではないかと続けた。鉛筆の正しい持ち方を教える方法として、全校朝会で紹介した図3と図4の方法を紙面上で紹介した。

この全校朝会と学校通信を発行してから後1ヶ月程、鉛筆の持ち方を意識をしている子供が多く見られた。私が教室を回ると、「あっ」と言って、よい持ち方をしようとする子供がいた。しかし、しばらくすると子供の意識も教員の意識も、正しい持ち方よりも、字をきれいに書くという方に向いてしまい、ほとんどの子供が今までの我流の持ち方に戻ってしまった。そこで、卒業する直前の6年生に向けて、再度鉛筆の持ち方の指導を行った。3学期に各学級で行う、校長からの最後の授業の中で、鉛筆の持ち方を扱うことにしたのである。6年生で正しい鉛筆の持ち方ができている子供は、見渡したところ2割程である。まず、鉛筆の持ち方の大切さを伝え、各自にダブルクリップを配り、図4のように鉛筆を挟み、人差し指を入れさせた。6年生の子供は、このようにクリップを使うことでほぼ全員が正しい持ち方をすることができた。卒業前の校長からのメッセージということで、子供たちにはかなりのインパクトを残せたと思っている。「鉛筆の持ち方にこれから気を付けていきます」という授業の感想を書いた子供もいた。しかし、正しく鉛筆を持ってない教員も増えてきていて、正しい鉛筆の持ち方を定着させることの難しさを感じているところである。卒業前の子供たちには「鉛筆の持ち方は大切なんだ」ということは意識させることができた。

(2) 歯を大切にすることを育てる実践

歯は、一生の宝物である。「80歳まで20本の歯を残そう」という8020(ハチマルニイマル)運動[日本歯科医師会 1989]を厚生省も国民に促している。私には自分の歯がなくなるということは、関係ないことだと思っていた。しかし55歳を過ぎた頃に、右下の一番奥の歯茎が腫れてきた。歯医者に行くと、「この歯は子供の頃に虫歯になって神経を取った歯で、弱い歯になっている。骨にしっかりとは支えられていません」と言われた。炎症部分を消毒してもらったが、結局歯を抜くことになってしまった。自分が子供の頃の事を悔やんでも仕方がない。自分の体験を未来のある子供たちに伝え、子供たちには、40年後に歯をなくして苦しむことがないようにという思いを強くもつようになった。そこで、全校朝会で直接子供に働きかけるとともに、学校通信で「子供のうちに歯を大切にすること」を保護者に啓発する実践を試みた。

この実践は平成25年6月行った。時期は6月6日の虫歯予防デーの前に設定した。まず、全校朝会で「最近私の歯が抜けてしまいました」という話から始め、「子供の頃に歯を大切にすることがいかに大切か、55歳を過ぎて実感した」ということを子供たちに伝えた。歯は子供だけの努力では大切にすることができないので、学校通信に「55歳を過ぎて、歯を抜くことになった体験談」を載せ、保護者へも子供の歯の大切さを認識してもらうようにした。書き出しを「私は虫歯があっても歯医者に行ったら治してもらえ。食事の時にはよく噛んで食べているので歯は丈夫です。最近は定期的に歯医者に行って歯と歯茎の状態をチェックしてもらっていて、歯医者からは特に問題ないと言われていて、まさか歯を失うことなどないと思っていました」[田頭 2013]と、歯の心配はしていなかったとした。55歳を過ぎてから、歯が痛み出してきて、レントゲン写真を見た歯医者から「昔神経を取った右下の奥歯は、根っこが細くなっていて、骨に入っていないので、近々抜けま

すよ」と言われた。それでも抜けるのはだいぶ先のことだろうと思っていたが、1年ほどしたら本当に歯がぐらついてきた。そしてとうとう抜くこととなった。歯はいとも簡単に、たいした痛みも伴わずに抜けた。たった1本の歯ではあるが、何か心に大きな穴が空いた感じだ。歯が抜けたのは乳歯が抜けた時以来の久々の感触である。しかし、今回は乳歯と違ってもう二度と生えてくることはない。食事にも影響したが、一番奥の歯だったので、しばらく経つと、歯がなくなったことを忘れてしまっていた。すると今度は、突然左下の奥歯の歯茎が腫れ、小さな風船のように膨らんだ。歯医者には、「昔神経を取った歯の根本に歯が残っていたのです。年を取って体の抵抗力が落ちてきたことで、炎症が大きくなって膿がたまったものです。抜いてしまえば腫れはなくなります」と言われて、もう1本歯を抜くことになった。この体験を学校通信に、「私の歯がこのようになったのは、若い頃に虫歯をたくさん作ってしまったことが原因です。虫歯が進む前に治療をしておけばよかったと、今頃思ってももう手遅れです。若い頃の不摂生が、年齢を重ねた今になって出てくるということを実感している次第です」[田頭 2013]と表記し、子供の頃の歯の手入れが、いかに大切かを説明した。特に、乳歯から永久歯に生え替わる頃には、歯並びが乱れて歯垢がたまりやすい。また、生えたばかりの永久歯は酸にとっても弱い。食事をした時に口の中はいったん酸性になるが、しばらくすると唾液の働きで酸性ではなくなり、歯は再石灰化される。この再石灰化の時間が長ければ長い程、歯は虫歯になりにくくなり、どんどん丈夫になっていく。ところがしょっちゅうお菓子を食べていたり、甘い飲み物を飲んでいたりしていると、再石灰化の時間が短くなり、虫歯になりやすくなってしまう。特に寝ている時には唾液が少ないので、寝る前に何か食べると、口の中が酸性のままになり、虫歯になりやすい状態が長く続くということを学校通信で強調して伝えた。

翌年の歯科検診の結果を見ると、虫歯の罹患率は大きく下がり、虫歯があっても、ほとんどの子供は治療済みであった。この虫歯が少なくなったのは、各担任と養護教諭の日頃の子供への指導と、学校通信で歯の手入れの大切さを各家庭に伝えたことの効果であると考えている。しかし、校医の歯科医からは2組の兄弟の歯について、「手の施しようもない。もっと早く歯医者に連れて行ってあげればよかったのに」と言われた。この2組の兄弟には、歯を大切にしたいという私の願いは届かなかった。この2組の兄弟の家庭は、家庭支援センターのケースにもなっていて、学校への不信感を根強くもっていた。まず、担任と家庭との関係を構築していくことが大切と考え、校長と担任が情報交換を密にして、担任が小まめに子供の様子を見て、「お子様のことを心配しています」というメッセージを手紙や電話、面談などで粘り強く保護者へ伝えていった。どちらの兄弟も、下の子供が6年生になる頃に、ようやく保護者と担任の関係が築かれ、学校への信頼も取り戻してきたところである。この子供たちが大人になったときに、歯がどうなっているか心配は残ったままである。

(3) 心の奥底の愛情の壺の例えで、保護者の子供の見方を変えようとした実践

人は生まれたばかりの時は、誰かに世話をしてもらわないと生きていくことができない。人は自立するのに20年近くかかる。子供にとって、親とは何にも代えがたい大事なものである。子供にとっての一番の恐怖は、「親に見捨てられることだ」という話を、児童相談所の所員から聞いたことがある。2016年6月に北海道で2年生の子供が、車から降ろされて置いてきぼりにされた事件があった。7日後に無事に発見され「大和君が運ばれた函館市内の病院の医師たちによると、軽いかすり傷を負っているだけで大きいけがはないが、軽い低体温症にかかっているという」[BBC NEWS JAPAN 2016]とのことで、体は大丈夫なところだが、心の傷は想像もできないくらい大きいものと思われる。私は今まで虐待を受けていると思われる子供を何人も見てきた。どの子供にも共通していることは、親からどんなにひどい仕打ちをされても、親をかばおうとすることである。また、必要以上に周りに気を遣って、相手が喜ぶことを先回りしてしようとする子供も虐待が疑われる。

毎日必死になって親に気に入られようとしているのではないかということが想像される。ある保護者は「子供にいろいろとしてあげたくても時間がない」と言っている。しかし、短い時間でも子供を安心させてあげるような接し方があると私は考えている。親が頑張っている姿や、忙しい中でも自分の為にしてくれたということは、子供に伝わるはずである。虐待が疑われていて、傷ついている子供たちを、何とか救えないかと考えていたところ、養護教諭が児童心理学者の山脇由貴子氏の講演会の報告に来た。特に次の話が印象に残ったというのである。「子供の心の奥底には、愛情の壺がある。その壺に愛情を注がれて、あふれた分だけ人に優しくできる。この壺が満たされないと、人や自分を攻撃するようになってしまったり、鬱になったり自傷行為や自殺に至る事もある。この壺が割れたり穴が空いたり、あまりひどく傷ついてしまうと、後からいくら愛情を注いでも、愛情を満たすことが難しくなってしまう」[山脇 2016] という話であった。山脇氏は、19年間児童相談所に勤務し、虐待を受けたたくさんの子供たちを見ていて、子供の心を壺に例えたのだと思われる。

私には、どの子供もその子供なりに一生懸命に生きているように見える。子供の心を壺に例えた山脇氏の話、たくさん保護者に知ってもらい、保護者の子供の見方を少しでもよくしていきたいという思いから、学校通信で山脇氏の言葉を紹介した。そして、私の思いを「忘れ物が多かったり、乱暴なことをしてしまったり、意地悪をしてしまった子供も、今の自分より少しでも成長したくて、できないことをできるようにしたくて、優しい人になりたくて、その子供なりに精一杯頑張っているように見えます。未来を託す子供たちには、周りの大人たちからたくさんの愛情を注いでいきたいです。そして人に優しくできる人になって欲しいと願っています」[田頭 2016] と記した。保護者向けの学校通信であったが、教員からすぐに反応があった。まず私に山脇氏の話、養護教諭から、「よく山脇先生の話を読んでくださった。保護者が少しでも優しい目で子供を見るようになって欲しいです」と、話があった。他の教員からもたくさん感想が寄せられ、「心の壺を私も大切にしたいです」や、「様々な場で心の壺のことを保護者に伝えていきたいです」という反応であった。学校通信に「心の壺」の話を読ませたことへの、保護者の反応はなかなか見えないところであるが、教員の気持ちを変えることには成功したと考えている。

(4) 子供と過ごす時間は貴重なものということ保護者に意識させる実践

子育て世代は、日々追い立てられる中で、子供をちゃんと育てなければいけないという意識が強く働く。私は、「子供が思うように育たない」「言うことを聞かない」「散らかす」等と、マイナス面にだけに目が行ってしまう保護者がいることを、とても残念に思っている。ある卒業生の保護者から、「子供が小学生の頃を振り返ってみると、大変ではあったけれども、あの頃は楽しかったと思うことがよくある。子供が中学生になってからは、勉強や部活で親の相手はしてもらえなくなった」という話を聞いた。私の子供が小学生の頃を思い出してみると、大変なこともあったが、「幼児のように子育てに手はかからない。面白いものを見せると、興味を示したことは熱中する。日々成長して変化していく姿が頼もしい。遊びに連れて行っても喜んでついてくる」という小学生らしい反応を思い出す。後から振り返って、子供が小学生の頃はよかったと思うのではなく、子供が小学生でいる時に、子供が小学生でいることの素晴らしさ、そして素敵な時間だということ保護者に少しでも気付いて欲しいという願いを学校通信で保護者へ伝えた。

子供の頃は1年が経つのがとても長く感じる。しかし成長するにつれて1年がだんだん短く感じられるようになる。このことは19世紀のフランスの哲学者ポール・ジャネーという人が発案したジャネーの法則 [心理学辞典 1971] で説明できる。7歳の子供にとって1年間は人生の1/7で約14%である。40歳の人1年間は人生の1/40で2.5%になる。これを63歳の自分にあてはめると、私の1年間は人生のわずかに約1.6%である。これでは1年が速く過ぎると感じるのは当然である。これを逆に考えてみる。子供が10分間我慢したり集中したときの感覚は、大人の50~60分と同じことだ

と見ることがでる。45分間の授業時間全部に集中していた子供は、とてもすごいということになる。「子供の頃には、日々が新鮮で新しい発見がたくさんあるが、大人になるとあまり新鮮なことに出会わなくなるとか、大人になると同じことの繰り返しが多く生活が単調になり時間を短く感じる」と、言う人もいる。大人も子供も物理的には同じ時間を過ごしているが、感じ方はずいぶんと違うということである。「子供の頃には、誰もがもっていた感覚を大人になると忘れてしまい、大人の日線で子供に接してしまっている自分に気付くときがある。私の1年間はどんなに頑張っても人生の14%にはなりません、子供たちの目線に立ち、子供たちの感じていることを理解することはできると思います。日々新しい物に接していて、目を輝かせている子供たちと、時間を共有できればこれほどの幸せはありません」[田頭 2018]と記した。長いようで短い小学校の6年間を保護者に楽しんでもらいたいという思いを込めて、この学校通信を書いた。

保護者からは、「面白い法則があるのですね」とか「これからは、子供といる時間を大切にしようと思います」という反応があった。教員からも、「言われてみれば、子供がわずか10分間も我慢できない理由が分かったように思いました」や「自分と同じように考えてはいけない。もっと子供の気持ちに寄り添っていきたい」という声が聞かれ、この実践の効果を実感することができた。図5のように子供たちが生き生きと活動する場面をもっと増やしていきたいと考えている。

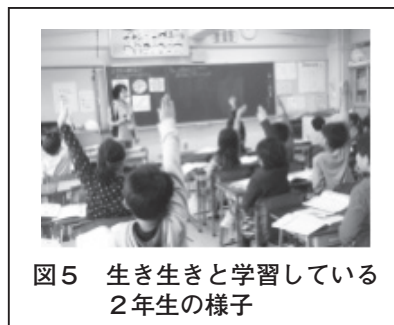


図5 生き生きと学習している2年生の様子

(5) 子供にインターネットの環境を与えることへの保護者への啓発する実践

「平成 28 年度児童生徒の問題行動等調査によると、「パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる」の認知件数は、10,779件で、いじめの認知件数に占める割合は 3.3%となっている」[総務省 2018]と、インターネットのいじめについて記されている。インターネットによる子供たちのトラブルは、実際にはもっとたくさん発生していることが容易に予想される。著者の勤務校でも、6年生の女兒が一人で渋谷まで行って、インターネットで知り合った小学生と渋谷で初めて出会い、一緒にお店を探検した動画をSNSにアップしていたことがあった。学校としては、子供一人で遠くに行くことも禁じているところであるが、この事例は一步間違えると大きな事件につながる危険があった。また、近隣中学校からはLine外しの問題をよく耳にする。

しかし、保護者のインターネットに関する危機意識の低さは大変深刻である。著者の勤務校では、インターネットの危険についての保護者向けの講習会をしても、毎年参加者が少なく、せっかく設定したのに参加が0人という年もあった。その後も保護者向けのインターネットの危険に関する講習会は毎年開いているが、参加者が少なく父母会の役員他は、数名の保護者しか集まらないという状況が続いた。そこで私は、インターネットに関する保護者の意識を高めるために、学校通信でインターネットの危険を題材に取り上げた。「私が子供の頃に、親からよく言われていた言葉を思い出しました。『誰も見ていないからといって悪さをしようとしても、神様はちゃんと見ているから、悪いことをしてはいけません』という言葉です。渋谷で大騒ぎをして軽トラックをひっくり返して警察に逮捕された人たちは、自分たちが誰なのか分からないだろうと思っていたそうです」[田頭 2019a]と最近のニュースを取りあげて書き出しを工夫した。

自分が誰だか「絶対にばれないという仮面」を手にしたら、周りの迷惑を考えずに、騒いだり、暴れたり、人に乱暴したりしてしまう人も出てくる。分別のあるはずの大人でも、絶対に自分の身元がばれないと思うと、犯罪行為も平気でしてしまうのである。子供が「自分のことが絶対にばれないという仮面」を手にしたら、いったいどうなることでしょうか。興味の赴くまま、いけないと思われることでも、簡単に手を出してしまわないでしょうか。インターネットの世界では、この「絶

対に自分がばれないと思ってしまう仮面」を、子供でも簡単に手に入れることができる。子供たちにインターネットの環境を与えるならば、保護者による十分な指導と観察が必要である。「誰にも見られていないし、カメラにも見られていないから、何をやってもよいと考えてしまうことは、とても寂しいことです。世の中がどんなに変わっていても、自分のことをいつも見ている人がいます。それは、自分です。子供たちには、自分が見ていてこれでよいのか、正しい判断なのかを考えられるような人になってほしいと願っています」[田頭 2019a]と、校長としての願いを学校通信に書くようにして、保護者へ安易にインターネットの環境を子供に与えることの危険性を訴えた。

著者の勤務していた大泉学園緑小学校では、2019年3月時点で、6年生では半分以上の子供がスマートフォンを持つようになっていた。調べてみると、フィルターを掛けていると答える子供は半数にも満たない。何か大きな事件が身近で起こらないと、なかなか保護者の危機意識を高めていけないと感じている。大泉学園緑小学校では、目に見えて大きなインターネットに関する問題は起こってはいない。しかし、誰にも相談できずにインターネットでのいじめに苦しんでいる子供がいるような気がしてならない。この学校通信を書いた後も、保護者向けのインターネットの危険に関する講習の参加率は上がらず、保護者の危機意識を高めることの難しさを感じている。

(6) 子供が小学生でいられる時間を大切にすることを保護者に啓発していく実践

保護者と話をしていると、「そんなに気張らなくてもいいのに。もっと子育てを楽しんだらいいのに」と思う方に出会うことが時々ある。自分の子供の欠点ばかりが見えてしまう保護者である。子供が頑張っている姿を見せても、この保護者は「他の子はまだ頑張っているでしょう」と言ってしまう。その時の残念そうな子供の顔は忘れられない。何とか、もっと保護者に子育てを楽しんで、子供と一緒に時間を幸せに過ごせないかという願いを、学校通信にまとめて保護者に伝えた。

学校通信を読んでもらえるかどうかは、文章の書き出しにかかっている。入学した頃の思い出や6年間に様々なドラマがあり、まだまだ課題はあるものの、こんなにも立派になったなあと思うことを最初に取り上げた。中学校に進むと部活や勉強などが忙しくなる。また思春期のまっただ中となり、家で話をあまりしなくなる子もいる。親と一緒に勉強することを楽しんだり、不安になって親を頼ってきたり、家族でどこかに出かけるのを素直に喜んでくれたりするの、小学生のうちだけかもしれない。子供が小学生の時には、子供だけで長い時間留守番をさせるわけにはいかないし、何かにつけて手がかかる。大変と思うことも多々ある。私は、二人の子供が成人して夫婦二人の生活にもどると、時々子供たちが小学生の時代を懐かしく思い出す。「あの頃は大変だったけど、あの頃はとても楽しかったな」という思いである。小学生の年代は体験を通してぐんと成長したり、あるきっかけで急に今までできなかったことができるようになったりすることがある。幼いけれどもけなげに頑張っている姿を見ると感動してしまう。親の都合で無理に成長させようとしてもなかなかうまくいかない。子供には一つ一つのことに成長するタイミングがあるようである。そのタイミングに合わせて適切な働きかけがあると、子供はぐんと伸びていく。子育てが終わって振り返ってみると、親の子供への働きかけはもちろん大切であるが、結局子供は親の背中を見て育っていくということを強く思うようになった。子供が小学生でいられるのは、6年間という限られた時間しかない。まだ手がかかって大変だと思うこともあるかとは思いますが、保護者には子供が小学生でいる時間を大切に、そして子育てを楽しんでもらいたいと願っていると文章を続けた。そしてこの学校通信の最後を図6のように毎年行われている6年生を送る会を取り上げ、「本日3月1日、6年生を送る会が行われました。全校の子供たちが一つの絆で結ばれたような、とても心が温まる会になりました。



図6 6年生を送る会
6年生による合奏

こんなにもすてきな子供たちの関係が築けているのは、学校を支えてくださっている地域の皆様、保護者の皆様の温かなご支援ご協力があるからと感謝しています」[田頭 2019b] と結んだ。

この学校通信の保護者の反応は、よく分からないところであるが、教員からは、「自分もそう思う」や「子供の成長のタイミングをよく見ていきたい」「われわれ教員は子供をととても大切にしているのだが、そのことが十分に保護者に伝わらない。保護者と教員で、一緒に子育てをしているというように思って欲しい」等という反応が寄せられた。保護者を意識して書いた学校通信であったが、教員の中に私の思いは通じていった。

Ⅲ 考察

校長2校目の練馬区立大泉学園緑小学校での7年間に書いた学校通信で、伝えたかったことは、「どの子供も置かれた環境の中で、精一杯生きているということ。保護者の方々には、子育てを力まずに子供と一緒にいる時間を楽しんで欲しいという願い。子供には、自然に子供らしくして欲しいという願い。また、子供たちは存在しているだけで、将来の夢であり、明日の希望になっているということ」であると、改めて思い返した。校長の気持ちを込めた学校通信は、直接保護者に届く場合と、教員に先に届きそれから時間を掛けてじっくりと保護者へ伝わっていく場合があることが分かった。7年間の校長勤務の中で、入学してから卒業までの6年間を一緒に過ごすことのできた子供たちが2学年ある。6年間の子供たちの成長は、本当にすごいものだと思う。また、大泉学園緑小学校での7年間を振り返ってみると、保護者や教員である大人も大きく成長していることに気付いた。私自身もこの7年間の間にあった、いろいろな出来事、子供や教員、保護者や地域の方々、様々な人との関わりの中で成長させてもらったことを実感している。

大泉学園緑小学校では、500世帯ほどの家庭の他に、地域の施設や町内会や関係者なども合わせると1000部ほどの学校通信を毎月配布していた。学校通信に載せた校長の願いを地域に届け、学校の信頼を回復し、この学校通信による実践が子供たちのためのよりよい学校作りに寄与したと考えている。

<文献>

- 田頭 裕 (2012) 「正しい鉛筆の持ち方」『練馬区立大泉学園緑小学校学校通信 2012年12月』
- 田頭 裕 (2013) 「6月4日は虫歯予防デー」『練馬区立大泉学園緑小学校学校通信 2013年6月』
- 田頭 裕 (2016) 「心の奥底の愛情の壺」『練馬区立大泉学園緑小学校学校通信 2016年7月』
- 山脇由貴子 (2016) 「児童心理学講演」
- 心理学辞典 (1971) 「ジャンナーの法則」『ミネルヴァ書房』
- 田頭 裕 (2018) 「子供と過ごす時間を大切に」『練馬区立大泉学園緑小学校学校通信 2018年1月』
- 総務省 (2018) 「ネットいじめの現状」『いじめ防止対策の推進に関する調査結果に基づく勧告』
- 田頭 裕 (2019a) 「平成最後のお正月を迎えて」『練馬区立大泉学園緑小学校学校通信 2019年1月』
- 田頭 裕 (2019b) 「子供が小学生でいる時間を大切に」『練馬区立大泉学園緑小学校学校通信 2019年3月』

<参考にしたwebページ>

- saita PULS (2012) 「子どもに教えてあげて！正しい鉛筆の持ち方、【クジャク法】って知ってる？」 (<https://saita-puls.com/5963>, 2020年2月4日閲覧)
- 日本歯科医師会 (1989) 「8020運動」 (<https://www.jda.or.jp/enlightenment/8020/index.html>, 2020年2月7日閲覧)
- BBC NEWS JAPAN (2016) 「大和君はどうやって生き延びたのか 行方不明の7日間」 (<https://www.bbc.com/japanese/36443797>, 2020年2月7日閲覧)